



日本海軍の、五分前  
の精神に学ぶ

koberyol

明治の初期、日本の海軍の組織は、イギリスの技術的・物質的恩恵を受けて育った。明治二年、兵部省が設置されてから軍事教官として明治六年、イギリス海軍のアーチボルド・ダグラス少佐の指揮の下、東京・築地に海軍兵学校寮が設置され、そこには世界共通の海軍的息遣いが生まれたが、塙の外には徳川三百年の「日本の特殊性」の空気がいまだ、色濃く瀰漫していた。

日本海軍発祥当初に、当時の日本人が師事したイギリス海軍の教育法は、マン・ツー・マンといい（OJT）、実地実物教育で人間同士の「しつけ」教育が旧制中学校を出たばかりの年齢、十七、八才の生徒達にマッチした感がある。

最近、企業においても「五分前の精神」が取り上げられている。目的は、「時間を厳守する」という意味であり、生産性を向上させるためには誠に結構なことである。

さて、海軍の「五分前の精神」はどの様に定着してきたか？

古い資料によるとこうある。明治の初期、海軍が創設された頃、艦内には電信、電話、拡声器などの通信設備はなかったので、指示・命令伝達は口頭によるものであった。

伝令が艦内を一回りするのに「五分間」かかったことから、定刻の五分前を予告するようになった、とのことである。

「五分前の精神」の目的を考えると、次に掲げる事柄が考えられると思うのである。

- ①まず「事前の準備をしっかりとやれ」。
- ②次に「常に有事即応の態勢をつくり、全力を発揮せよ」ということである。
- ③時間厳守。
- ④「五分前の精神」の効果として、
  - イ．現場の作業員がいっせいにスタートできる。
  - ロ．作業員のコミュニケーションが確立する。
  - ハ．チームワークの強化ができる。
  - ニ．待ち時間がない。
  - ホ．公私ともに信頼感が生まれる、など。

私は現在もこの「五分前の精神」を実行している。実際「五分前の精神」が習慣化された心ほど強いものはないと痛感している。

よく考えるまでもなく、我々は限られた時間の中で生きている。だから時間を軽視できない。ところが、時間の「限られた側面」を無視してしまいがちだ。

失敗というのは、時間に追われている時に起きやすいもので、生活全般に「ゆとり」を持っていた方が注意力は高まる筈である。

この「五分前」を活用すれば、生活は豊かになる。

ナポレオンは言った。

「愚人は過去に生き、賢人は現在に生き、狂人は未来に生きる」と。  
時間はこの地球上のすべての人々に24時間、与えられている。私たちが時間から求められているのは、それについて考えることではなく、『より充実して生きることである』と思う。

主要参考資料・文献

吉田俊雄 「日本海軍のこころ」 文藝春秋

上村嵐 「現代に活かす海軍名語録」 先見経済